山中漆器うつろいカップ プレミアムギフトバコ

うつろいカップ

北陸の四季折々の風景、時間のうつろいを映し出すカップ。木地の美しさを透かす「拭漆」の伝統を受け継ぎながら、表面はひんやりとしたメタリックカラーで現代的に仕上げられています。
薄く削り出された上品なフォルムは口当たりもやさしく、どんな飲み物も特別な味わいに。
山中の自由な文化の中で育まれたあたらしい漆器が、日々の暮らしを軽やかに彩ってくれます。

このカタログでは、下記の商品からお選びいただけます。

商品番号 | 7051

うつろいカップ ＜シルキーピンクあかね＞

“四季のうつろい”をテーマに、春の桜や梅をイメージした色。内側は伝統の拭漆によって仕上げています。山中温泉の純喫茶『芭蕉珈琲』のドリップバッグとのセットでお届け。

セット内容／うつろいカップ シルキーピンクあかねM（直径約7.5cm×高さ約7.6cm／容量200ml／天然木）、芭蕉珈琲 山中温泉名所五景（ドリップバッグコーヒー10g×5個）

商品番号 | 7052

うつろいカップ ＜グリーンパールナチュラル＞

“四季のうつろい”をテーマに、初夏の新緑、海と砂浜をイメージした色。内側は透明ウレタン仕上げで木目の美しさが楽しめます。山中温泉の純喫茶『芭蕉珈琲』のドリップバッグとのセットでお届け。

セット内容／うつろいカップ グリーンパールナチュラルM（直径約7.5cm×高さ約7.6cm／容量200ml／天然木）、芭蕉珈琲 山中温泉名所五景（ドリップバッグコーヒー10g×5個）

商品番号 | 7053

うつろいカップ ＜シャンパンゴールド拭漆＞

“四季のうつろい”をテーマに、秋の夕景や紅葉をイメージした色。内側は伝統の拭漆によって仕上げています。山中温泉の純喫茶『芭蕉珈琲』のドリップバッグとのセットでお届け。

セット内容／うつろいカップ シャンパンゴールド拭漆M（直径約7.5cm×高さ約7.6cm／容量200ml／天然木）、芭蕉珈琲 山中温泉名所五景（ドリップバッグコーヒー10g×5個）

商品番号 | 7054

うつろいカップ ＜クールブラック黒摺＞

“四季のうつろい”をテーマに、冬の鉛色の雪空をイメージした色。内側は伝統の拭漆によって仕上げています。山中温泉の純喫茶『芭蕉珈琲』のドリップバッグとのセットでお届け。

セット内容／うつろいカップ クールブラック黒摺M（直径約7.5cm×高さ約7.6cm／容量200ml／天然木）、芭蕉珈琲 山中温泉名所五景（ドリップバッグコーヒー10g×5個）

What's

— うつろいカップとは？ —

1. 山中漆器の伝統技法をベースにした現代的なデザイン
2. 4色のカラーは四季のうつろいをイメージ
3. ケヤキの木を薄くくりぬいて作ったシンプルで美しいフォルム

現代の暮らしのなかで“普通に”使える器づくりを。
時代に合わせた新しい表現で伝統を未来につなぐ漆器店

1912年、木地師の浅田京作により創業。二代目までは木地の卸業を営んでいましたが、三代目は職人ではなく商人としての道を選び、オリジナル商品の開発に着手。百貨店での販売を通じて、山中漆器の魅力を全国へと広めました。1998年には直営店を開設。以来、伝統技術を受け継ぎながら、現代の食卓に似合うカジュアルなデザインの器を次々と企画・製造・販売しています。

有限会社浅田漆器工芸
石川県加賀市山中温泉菅谷町ハ 215
TEL 0761-78-4200
［Instagram］asada_shikki1976

上／山中漆器に特筆すべき「拭き漆」の技法。
下／ろくろを使って成型する「挽物木地」。熟練の技術がなければ美しい木目が現れないのだとか。

現代の暮らしに合う漆器を“普通”に使ってほしい

山中漆器は、石川県の山中温泉地区に伝わる伝統工芸。安土桃山時代に木地(漆で塗る前の器)の職人らが定住したことがその発祥で、塗りや絵付けの技術を他の産地に学びながら独自の文化として発展しました。

「そうした歴史背景を持つためか、良いと思ったものをどんどん取り入れる文化があるんです。この自由度の高さはほかの産地にはない特色かもしれません」と話すのは『浅田漆器工芸』の代表、浅田明彦さん。同社の四代目として、かねてから「漆器をもっと“普通”に使ってほしい」という思いを抱いていました。

「漆器は格式の高い器で、お正月のような特別な機会にだけ戸棚の奥から出してくるもの…。そんな先入観を取り払いたい。しかし十数年前に初めて商品企画を任されたとき、今のままでは難しいなぁと。現代の食文化に馴染むデザインに変えていく必要性を強く感じたんです。それで最初に作ったのが、カレーやパスタに合うような漆器です。わたしの好きな食べ物だから…という単純な理由だったんですけどね」。

斬新な「漆器のパスタ皿」を皮切りに、普段の食卓で使いやすい器を続々と発表。自由な山中漆器の可能性をさらに押し広げています。

現代的なデザインのカップに四季の移ろいを映し出す

山中漆器は、他に先駆けて戦後すぐの時代に「近代漆器」に取り組み始めたといいます。木と漆の「伝統漆器」に対し、樹脂製の素地にウレタン塗料を塗る手法。本来の目的は生産性の向上にあったといいますが、新しい工芸の発展にも大きく寄与しました。同社の人気商品、パステルカラーの「うつろいカップ」は、古くから伝わる挽物木地にメタリックなウレタン塗料を丁寧に吹きつけて仕上げた伝統と現代のハイブリッドです。

「“インスタ映え”がトレンドワードだった頃に若い人向けに企画したんです」と浅田さんはいいますが、斬新な色彩をまといながらも細部に至るまで緊張感のある美しい器は、世代を問わず多くの人の心を惹きつけました。

名前の由来は「四季のうつろい」。春の桜、夏の新緑、秋の山々、冬には鉛色の空。どこかひんやりと感じられる表面に対して、カップの内側からは木のぬくもりが。山中の伝統漆器でよく用いられる、漆を塗っては拭き取る作業を繰り返す「拭漆」の技法により、堅牢な漆の層の奥に美しい木目が透けて見える仕上がりになっています。

ごく薄く仕上げられたシンプルなフォルムも魅力。初代が木地師であったという同社に伝わる精巧な技術が、伝統工芸の品格を醸し出します。夏をイメージした色「グリーンパールナチュラル」では、内側がクリア塗装になっていて、木地の魅力をより一層感じることができます。

松尾芭蕉も愛した山中温泉で珈琲の香りに包まれる

かの松尾芭蕉も山中温泉を愛し、9日間もの逗留期間で清らかな湯と渓谷の景観を楽しんだといいます。それにちなんだ名の純喫茶『芭蕉珈琲』は山中温泉に1966年創業。現在は2代目の嘉野勝仁さんが店主を務めています。温泉客に限らず、自家焙煎のスペシャルティコーヒーを求める愛好家や昭和レトロな世界観を求める若者など、さまざまな人が集まる名店です。

浅田代表も常連で、カウンター越しの世間話を楽しむこともしばしば。「浅田くんと呼んでいるんですよ」と親しみをにじませながら、嘉野さんはうつろいカップにぴったりのコーヒーをご紹介くださいました。「山中温泉を訪れた人が旅の思い出を持ち帰れるように」と作られた特別なドリップバッグで、パッケージには山中温泉の名所が描かれています。ブラジルの『トミオフクダ農園』で丁寧に育てられた樹上完熟コーヒーを40%も配合し、自家焙煎で中煎りに仕上げた贅沢なブレンド。うつろいカップとともに楽しめば、コーヒータイムがより一層豊かな時間になりそうです。

今日の自由な発想が未来の伝統を作り出す

最後に、山中漆器の未来について浅田代表にお訊ねすると「常識にとらわれず、時代に合うやり方や自由な発想を大切にしてこそ、伝統が未来へ繋がっていくものだと思います」との言葉。

松尾芭蕉の時代よりずっと以前からここは温泉地でした。はるばる訪れた人々が日ごろの疲れを癒し、土産として漆器を買い求めたといいます。「最近のお客さんにはどんな器が喜ばれるだろう」という柔軟な目線を持った職人たちが、今日の自由な気風を醸成してきたのでしょう。

だとすると、山中漆器の歴史と伝統は、その時代で最もあたらしい器にこそ色濃く反映されているとも言えそうです。うつろいカップもまた、そのひとつに違いありません。

浅田（あさだ） 明彦（はるひこ）さん

『有限会社浅田漆器工芸』代表取締役。京都伝統工芸大学校を卒業後、山中での修行を経て2010年に入社。伝統的な挽物木地や塗りの技術をベースに、今の時代に合わせた器が高く評価され、全国伝統的工芸品公募展や経済産業省製造産業局長賞など、数々の受賞歴を持つ。

浅田漆器工芸

嘉野（かの） 勝仁（かつひと）さん

山中温泉に1966年創業の純喫茶『芭蕉珈琲』店主。25年前、創業者である両親から店を継ぎ二代目となった。開業当時から変わらない「芭蕉ブレンド」を看板商品に掲げつつ、現在はスペシャルティコーヒーの販売にも力を入れている。

芭蕉珈琲

上／煎りたての豆を使用したサイフォン式コーヒー。
下／昭和41年創業の昭和レトロな店内。昨今の純喫茶ブームで若い人も多く訪れ、世代を超えて愛されています。